

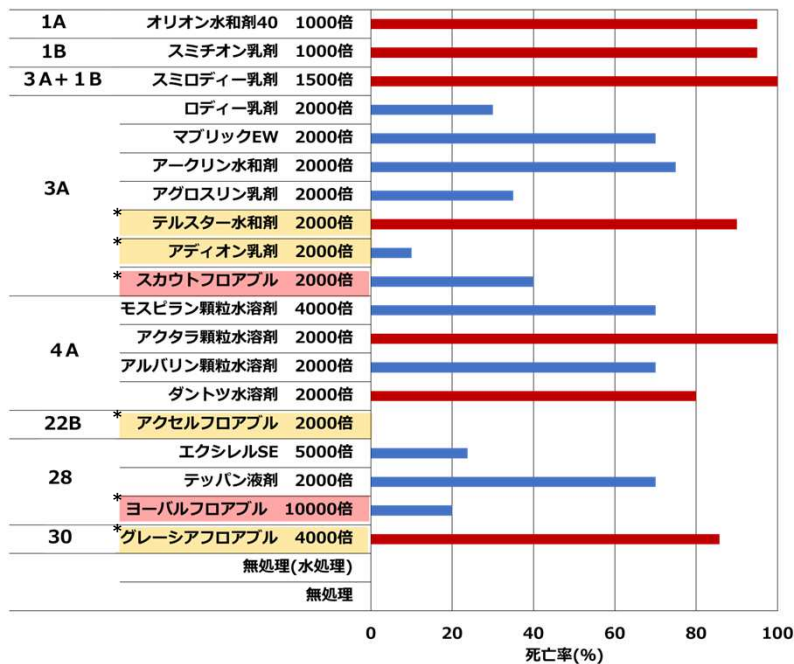
コアオハナムグリに対する各種薬剤の防除効果

コアオハナムグリは花粉や蜜を求めて花に飛来し、吸蜜時に子房部(幼果)に線状の傷をつけるため、果実の外観品質を低下させる。そこで、本年度は本虫に対する各種薬剤の効果について検討した。

■直接殺虫試験（令和7年5月20日実施）

かんきつでコアオハナムグリに登録がある薬剤を主に選択し、直接殺虫効果を調査した。

試験方法：コアオハナムグリを5頭ずつ(4反復/区)薬剤に浸漬し、風乾させた後、処理7日後に生死を判定した。



* 薬剤名は、かんきつで登録があり、コアオハナムグリに登録がない薬剤。
* 薬剤名は、かんきつで登録がなく、その他の果樹でコガネムシ類登録がある薬剤。
赤で示したものは死亡率が80%以上のもの

図1 各種薬剤の直接殺虫効果

・オリオン水和剤、スミチオン乳剤、スミロディー乳剤、アクタラ顆粒水溶剤の殺虫効果が高かった。
・ダントツ水溶剤、グレーシアフロアブル*1、テルスター水和剤*1は、上記薬剤に比べ効果は劣るものの、効果がやや高かった。

■野外放飼試験（令和7年5月8日～5月20日実施）

試験方法：供試樹に各種薬剤を背負い式動噴で5月8日に十分量を散布した後、30花程度の着花に枝を調整し、ネットで被覆した。散布から1、3、7日後に供試虫を12頭ずつ放虫し、その5日後に生死判別と幼果の被害を程度別に調査した。

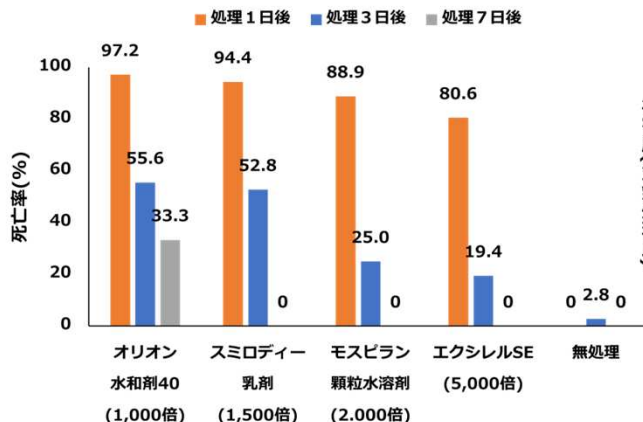


図2 各種薬剤の残効

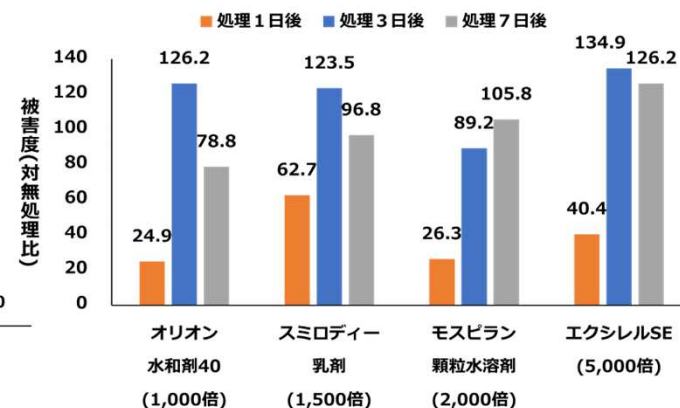


図3 被害度調査結果

※ 被害度(対無処理比) 値が低いほど薬剤の効果が低い

- ・4剤とも処理1日後まで殺虫効果が高かった。
- ・薬剤の効果は処理3日後には低下し、残効は7日足らずと短かった。
- ・被害度は薬剤の殺虫効果の結果と対応しなかった。

原因として、直花を試験に用いたことにより、落花が多く発生したことや、ハナムグリ類による被害との区別が困難であったことが考えられた。

このことから、試験方法を再度検討し、来年度も試験を実施する予定である。

まとめ

・花が2～3割開花した時期に、殺虫効果の高い薬剤を選択して薬剤散布してください。また、コアオハナムグリは開花期の間、次々と園地に飛来します。効果の高い薬剤でも残効は概ね、1～3日程度ですので、発生が多い場合には、開花盛期にも防除を実施しましょう。

